

## 姉妹都市提携 30 周年記念タスカルーサ市派遣 習志野市民訪問団に参加しました 「友情を通して平和推進」

津田敬吾（日本語教室部会）

標題に用いた引用文は、8月27日の米国アラバマ州タスカルーサ市の地元紙「ザ・タスカルーサ・ニュース」の一面に掲載された記事の見出しです。記事は、タスカルーサ市がその姉妹都市3市からの訪問団を迎えて実行中の歓迎行事の状況を伝える内容です。見出しの言葉は使い古されて新鮮味がないようにも感じられますが、進行中の行事の目的と行事現場の雰囲気をよく表しています。私たち習志野市からの訪問団一行もこの精神に沿って行動できたと思います。

今回は日本の習志野市、ドイツのショーンドルフ市、ガーナのスヤニ・テチマン市の訪問団がタスカルーサ市に集合しました。アジアと欧州、アフリカの大陸からそれぞれ一市がアメリカ大陸の一市に集まったこととなります。タスカルーサ市と習志野市が姉妹都市関係を結んでから30年、ショーンドルフ市は20年、スヤニ・テチマン市は5年になります。この歴史を踏まえ8月25日、タスカルーサ市が姉妹都市活動を開始して30年になったことを祝う祝賀晩餐会が盛大に催されました。タスカルーサ市を訪れている各市訪問団が歓迎を受ける晩餐会でもありましたが、その中で今回の訪問行事中の最重要イベントとして、今後とも姉妹都市関係を継続

発展させていこうとの文書が調印され、各市の代表者、習志野市の場合は宮本市長が署名されました。

この晩餐会を除いては、参加各市の訪問団メンバーとタスカルーサ市側参加者はとてもインフォーマルな雰囲気の中で友好を深めました。訪問団メンバーがタスカルーサ市、ひいてはアラバマ州、アメリカ全体に対する理解を深めるのに役立つような施設、場所を選んで見学の案内をしていただいたように思います。

市内のショッピング・センターではわずかながら市民の日常生活を垣間見ることが出来ました。アラバマ大学キャンパスでは、歴史を経た建物の美しさに感動しただけでなく、市民が一様に親しみを抱き、誇りに思っている大学だとの雰囲気を感じました。ここでは大勢のタスカルーサ市民も参加してバベキューパーティが開かれました。その際、宴もたけなわになったころ、宮本市長と市民訪問団の一員として参加した高校生の畑中泰人君の二人が和太鼓を演奏して満場の喝采を浴びました。

また、市内のタスカルーサ・ゲートウェイ（“機会への入口”の意）と呼ばれるアルバータ技術革新・発見センターでは巨大な(16ft x 5ft)タッチ・パネルや3D印刷機などに大人も子どもも手を触れて直接情報を検索したり工作したりして、最新電子情報技術の発展成果を体験できるようになっているのを見ました。また近郊のバーミングハム公民権運動博物館では、アメリカにおける人種差別およびその撲滅を期して闘った人権活動の歴史を見ました。同じく近郊のハンツヴィル宇宙・ロケットセンターでは、多数の巨大なロケットや



公式晩餐会

数々の部品・装置などに目を見張り、人類の夢がこんな形で一步一步実現されてきたのかとの感動を禁じえませんでした。これらを見て、私はこれからも米国の人との交流を深め、手を携えて前進できれば素晴らしいと感じました。

市民訪問団の中には希望により、日中の行事が終了したあとアメリカ人の家庭にホームステイをした人がいました。寝泊りだけでなく、公式行事開始場所までの送り迎えを含む親身なお世話を願ったわけで、単に相互理解という以上に家族のような親近感を育まれた人も多かったようです。他方、期間中ホテルに滞在したメンバーはショーンドルフやスヤニ・テチマンの訪問団メンバーと言葉を交わす機会を持つことが出来、これも有意義でした。

私たちが最初にタスカルーサに着いた時、私たちを迎えてくれた人の中には、大げさな身振りでメンバーとの再会を喜ぶ人、前に習志野へ行ったことがあると言いながら歓迎の言葉を掛けてくれる人などが少なくありませんでした。初対面でも親しさがあふれている感じでした。別れる時には今年の10月には習志野へ行くのでよろしくと言う人がおられ、そのほかにも是非また会いましょうと言う人もいました。草の根の国際交流の芽生え、そ



アメリカ、ガーナの人たちと

の成長過程を目の辺りに見るような気がしました。

タスカルーサからの帰路、途中ジョージア州アトランタではNIA参加者単独の活動として一日観光をしました。私たちがよく知っているCNN社やコカコーラ社の本社があり、それらの開放されている部分を見ました。その後で、人権活動家マルチン・ルーサー・キング師の生家や、作家マーガレット・ミッチェルが『風と共に去りぬ』を執筆したといわれる家などを見て来ました。短い時間でしたがこれも楽しい有意義な思い出になりました。

以上のような訪米の機会、また先方からの訪日者受入れの機会には、できる限り大勢の人が参加されると良いと思いました。